

# みんなで築こう人権の世紀

～考えよう相手の気持ち 育てよう思いやりの心～

12月4日～10日は

人権週間

12月10日は「世界人権デー」、4日から10日までが人権週間です。この機会に改めて人権問題について考えてみましょう。

最近匿名で書き込みができることから、インターネットによる誹謗中傷や人権を侵害する書き込みやネットいじめの被害が増えています。今回は、その現状に詳しい佛教大学教育学部教授の原清治さんから、寄稿していただきました。

佛教大学教育学部教授  
原清治さん



原清治さん プロフィール  
昭和35年長野県生まれ。現在、佛教大学教育学部教授。佛教大学教育学部長・大学院教育学研究科長。専門は教育社会学、学校臨床教育学、教員養成。学校で起こるさまざまな問題の背景となる要因や、そのメカニズムについて研究している。京都府いじめ問題有識者会議委員も務める。

## ネットいじめはなぜ「痛い」のか

1 「いじり」か  
「いじめ」か

大津市で起きた中学生のいじめ事件とその報道による影響の大きさは、この問題に関する社会的関心を高めただけでなく、教育委員会のあり方そのものに対する議論や、学校関係者に向けられる視線の厳しさを伴って進行している。しかし肝心の子どもたちの世界からは、その影がなくならないどころか、いじめやそれが原因と思われる痛ましい自殺の連鎖があとを絶たない。こうしたなかで、文部科学省は「いじめ防止対策推進法」を策定し、問題の発生や抑止に懸命である。この条文の中には、「インターネットを通じて行われるいじめに関する事案に対処する体制の整備に努める」という記述がみられる。こうした、新たにネットツールを利用した子ども同士の誹謗中傷は「ネットいじめ」や「サイバー・リンチ」などと呼ばれている。

2 ネットいじめとは何か

2009年9月の京都市の調査によると、小学生高学年の携帯電話の所持率は28%、中学生は61%、高校生は93%という結果が出ている。また、保護者を対象とした調査を見ると、小学生ではキッズケータイが主流であったのに対し、中学生になると、従来型ケータイやスマートフォンに移行していることが確認できる。

が送信者にも把握できる「既読」機能が搭載されている。したがって、メールを確認すればすぐに返信しなければ「あの子は私のメッセージにすぐに返事をしてくれない」と人間関係に影響があること、果ては既読機能が悪用したLINE上の「無視」が横行しており、ネット上のやりとりにも神経をすり減らしている子どもは決して少なくない。

この状況は、いじめの世界にも暗い影を投げかけている。ネット上に実名や学校名をあげて、悪口を書きこまれたりするケースが増えている。「ネットいじめ」と呼ばれるものである。

ネットいじめには、大きく2つの種類がある。ひとつは「死ね」、「消えろ」といった誹謗中傷を本人のプロフ(注)やメールに直接送信する「直接型」

のネットいじめであり、もうひとつが、いわゆる学校裏サイトや、不特定多数が閲覧できる掲示板などにネタを書きこむ「間接型」のそれである。最近になって増加傾向にあるのは後者で、ネット上へ写真や動画の投稿をする「さらし」が深刻な問題を引き起こしている。

2010年に実施した調査でも、すでに小学生の約1割、中学・高校生にいたっては3割近くが「ネットを利用してイヤな思いをしたことがある」と回答している。ネットいじめの怖さは、嘘や誹謗中傷、他人に

知られたくない情報までもがネット上に「さらされて」しまうこと、それを「誰が書き込んだのか」と周囲を疑って疑心暗鬼になったり、人間不信に陥ってしまう点である。

また、ネットいじめにあった子どもたちの多くが「自分の書き込みを見えなくするためにネットいじめに加担する」とか、「いやな目にあつたことを誰にも相談しない」ことに注目しなければならぬ。これまでのいじめと異なり、ネットいじめは、画面上で行われるため倫理的な垣根が低く、どこかでネットいじめが発生すると、加速度的に周りに広まってしまふこと、親に相談することを避ける傾向があることも明らかになっていく。私たちがこのことに十分注意する必要があるだろう。

また、ネットいじめが流行する背景には、どうやら親や教師たちが「ケータイの世界は自分たちにはわからないから」という言い訳をするということも問題があるようである。



前記のように、ネット上での「コミュニケーションを重視し、さまざまな書き込みを「ネタ」として扱うことに慣れてしまった子どもたちにとって必要なのは、やはり原点に戻って、対面でのコミュニケーション機会、とりわけ多様な他者とつながる力ではないだろうか。ネットいじめの被害にあう子は、ネットの世界への依存が高くと、現実世界でのコミュニケーションがとりにくくなる場合が多い。子どもに「おはよう」「今日はどんなことがあったの?」「今、興味のあることは何か?」といった対面でのやりとりをする機会を増やし、子どもが自分の意見を面と向かって話すフェイス・トゥ・フェイスの関係を意識的に「しかけ」ることが大切である。それが、相手の気持ちを理解し、思いやりの心を育てることになるのである。

(注) プロフィールの略。インターネット上に自分のプロフィールを紹介するサービス、もしくはサービ

守るために

こうした問題から子どもたちを守るために、われわれ大人はデジタルな子どもたちをどう守